

經濟論叢

第八十四卷 第六號

故名誉教授神戸正雄博士遺影および筆蹟・原稿

統計学＝社会科学的認識手段論の 問題点……………	大橋隆憲	1	
資本主義の運動法則における 論理的なものゝ歴史的なもの(二)…	吉村達次	17	
急速稅務減価償却をめぐる 所得稅會計の保守主義……………	高寺貞男	37	
ヘンリ・ジョージについての一考察…	北沢康男	55	
ソースタイン・ヴェブレンに関する 一研究……………	中山大	68	
神戸正雄先生による 再保險特約方式の輸入……………	佐波宣平	85	
記事			
神戸先生御逝去……………		91	
追憶文……………		96	
新村出	井藤半弥	本庄栄治郎	小島昌太郎
石川興二	嶋川虎三	大谷政敬	小山田小七
堀江保蔵	島恭彦	松井清	

昭和三十四年十二月

京都大學經濟學會

われ数人を招待して下さる慣例で、それが、ことしは経済学部四十周年記念式の翌日、奈良の月日亭で催されたのであった。

その日も、先生は、いつに変わらぬ大変なお元氣であった。車中、いろいろ、お話をしたなかで、*「先生、近ごろも、芝居や映画を、相変わらずご覧になりますか？」*とお尋ねしたら、*「いや、このごろは、もうずっと、テレビを見ておって、そういう方面へは、一向に参りません。」*とおっしゃった。これが、わたくしが、いま覚えてゐる先生の最後の言葉となつた。

わたくしどもの学生時代、先生は、芝居や映画がお好きであつた。そのころ、先生は、岡崎に住んでおられた。わたくしや同窓の、いまは亡くなつた内藤正太郎君などは、先生と大体同じ方面から、学校へ通つておつたので、よく途中で、先生にお遭ひし、いろいろ、お話を伺いながら、行くこともあるし、帰ることもあつた。そういう際に、よく芝居や映画のことが、話にのぼつたのである。このような関係で、二人は、先生に親しくしていただいた。わたくしが、卒業のとき、先生と、憲法の井上密先生とのご推薦で、住友銀行に入社したのも、そのお蔭であつたのである。

ことしの五月二十四日、神戸先生と同乗の車で、奈良へ行つたことがある。それは、大正十五年の経済学部卒業の方々が組織していられる有朋会が、毎年、この頃に母校の地の近くで、クラス同窓会を開催せられるにあたり、昔の先生として、われ

神戸正雄先生を想う

小島昌太郎

先生は、まことに、謹厳そのもの、至つて真面目な方で、また、研究に没頭せられ、勉強に倦むことを知られなかつた。それについてのアネクトも、いくつか伝わっているくらいである。わたくしが、住友を辞して大学にもどり、助教時代

「経済論叢」の編集をしていたとき、助手の方が、先生に原稿をいただきにゆくと、いつも、その場で、机の見出しから、清書した原稿をお渡しになるので、そのひとは、感心もし、驚きもしていた。それは、ほとんどみな、租税に関する論文か、時論かであった。先生の研究の成果が、論叢にのっていない号はなかった。

そのように勉強せられたのであるから、ときまたには、気晴しというか、芝居や映画を見に行かれるのであった。それで、内藤君のいいだしで、先生とわれわれ二人とが、芝居見物にお伴したことがあった。

それは、新京極の京都座が、新築成って、柿落しの興行のときであった。先代の松本幸四郎の「大森彦七」が呼びものであるが、三つか四つあったと思う。芝居がはてての帰途、われわれは、三条通りを東へ歩いて帰った。明治四十三年ごろのことだ、いまのようにタクシーなどはなく、電車やバスの便もなかった。われわれは、歩きながら、いま見たばかりの芝居の思い出や、批評をしながら楽しく語り合った。先生も、いろいろ、意見を述べられたが、どうも、少し、われわれによく分らない筋があった。

あくる日、教室で内藤君に会ったとき、前晩の話がでた。そのとき、彼のいうには、「どうも、ゆうべの先生の話は、大森

彦七と、その前の出しものと、ふたつを、ひとつにしておられたようだね」と。このことが、なぜか、いまなお、わたくしの印象にあざやかである。